

## 斎藤報恩会博物館の設立過程と運営方針

加藤 諭

### はじめに

本稿は、斎藤報恩会博物館の設立過程について明らかにするものである<sup>1)</sup>。斎藤報恩会は、宮城県桃生郡前谷地の地主であった斎藤善右衛門有成が1923年に設立した財団法人である。斎藤報恩会の活動については、吉葉恭行、米澤晋彦らによって、学術研究助成の実態に関する分析が進展している<sup>2)</sup>。吉葉、米澤の研究からは、斎藤家当主は理事長としての権限については抑制的であった反面、理事や評議員に東北帝国大学関係者が多数参画していた状況が明らかにされ、斎藤報恩会と東北帝国大学との密接な関係が解明されてきている。一方、菅野正道は、斎藤報恩会が郷土資料の調査、収集をおこなっていたことを指摘し、歴史、郷土史の分野に斎藤報恩会が果たした役割について言及している<sup>3)</sup>。斎藤報恩会のこうした大学における学術研究への助成と、仙台藩の藩政期の史料などを含めた郷土資料収集は、いずれも斎藤報恩会の活動の一端を示すものであるといえよう。しかし、これまでの先行研究では、学術研究への助成の側面、郷土資料収集の側面のいずれかに論点が収斂してきたため、斎藤報恩会は「学術研究助成に重点を置いて活動した<sup>4)</sup>」との評価と、「郷土文化の発展継承」に斎藤報恩会の特質を結びつける見方とが、十分結びつけられていない状況にあるといえる。斎藤報恩会が戦前期、財団法人として果たしてきた役割の全体像を明らかにするためには、斎藤報恩会の運営方針において、そうした両面がどのような接合あるいは比重が置かれていたのか、について分析していく必要がある。

こうした問題関心にたって、本稿では1933年に開館した斎藤報恩会博物館を対象として取上げる。斎藤報恩会博物館は後述するように、館長を畑井新喜司東北帝国大学教授が担っている一方で、開館に当たっては東北各地の郷土研究に関わるネットワークを利用した標本収集を模索するなど、学術研究と郷土研究の関係性の上に成り立つものであった。斎藤報恩会博物館については、これまで河田健によって、主として建築・設計の視点から分析が進められてきているが<sup>5)</sup>、斎藤報恩会および博物館の運営方針そのものを対象としたものではない。そこで本稿では、斎藤報恩会博物館が大学との関係において仙台におけるどのような議論の上に開館されることになったのか、またその開館にあたっての展示物や収蔵品について、どのような体制で標本収集などをおこなっていったのか、斎藤報恩会博物館が目指した学術研究と郷土研究の関係性にも着目しつつ、開館前後の博物館運営方針のあり方について、実証的に明らかにしたい。

時期設定としては大正期、東北帝国大学博物館設置構想が報道される1910年代後半から、斎藤報恩会博物館が設置に至る1930年代半ばまでを対象とする。史料については、大正期に関しては、東北帝国大学理学部教授会や概算要求に関する資料が残っていないことから、宮城県の地方新聞である『河北新報』の記事を中心に、大正末期から昭和初期については、斎藤報恩会が刊行していた『事業年報』、『財団法人斎藤報恩会時報』、『財団法人斎藤報恩会博物館時報』等の逐次刊行物を中心に分析を試みる。

## 1、斎藤報恩会博物館建設過程

### (1) 東北帝国大学における博物館構想

本章では、斎藤報恩会博物館建設に至るまでの経緯について、まずは確認していきたい。斎藤報恩会は1923年2月斎藤善右衛門が資産300万円を拠出し、それを基金とした財団法人として組織され、学術研究総務部と産業及社会総務部の2部体制を取ることになる。しかし仙台の地に博物館を設置する構想は、東北帝国大学の拡充とも関わりながら1910年代後半から議論がなされていた。

1918年に発足した原敬内閣では、文部大臣を務めた中橋徳五郎により、高等教育機関の増設が企図され、第四帝国議会に「高等諸学校創設及拡張計画」が提出されることとなる。東北帝国大学ではこの流れを受けて法文学部が設置され、理学部でも生物学科が増設されることとなる。この東北帝国大学理学部生物学科の増設において、併せて大学に博物館も設置する計画があったことが、宮城県の地方新聞である河北新報の記事からうかがうことができる。1919年1月16日付の河北新報では「図書館と博物館 法文科動植物科併置と共に東北大学内に設立」との見出し記事を掲載している。法文科は法文学部、動植物科は生物学科として結実していくことになるが、このときの記事には「増設計画の中には、其の必須条件として法文科に図書館、動植物科に博物館設立計画の含まれ居るは言ふを俟たず大学にては是等に関する具体案が疾くに成立つて居れど問題の一部が未だ文部省との間に繋留し居るために詳細の説明を控へ居る」と報道し、具体的な博物館設置位置についても「博物館は二高の空地か二高西運動場かの中に建築せられ世界植物の各標本、地質古生物学に関する実物標本、及各種の鳥獣魚介類を網羅すべく之を図書館に比すれば其の設備費に於て遙かに多額の支出を要すべしといふ」と触れている。また当時仙台は博物館が置かれていなかった都市であったことから、「大学に於ては右博物館を大学部内研究の用に充つるのみならず広く之を開放して初等中等教育界の参考に資し一般通俗教育上の便宜にも供すべしと云ふ」と教育目的のための一般公開も、機能として想定されていたことを報道している<sup>6)</sup>。河北新報によれば、東北帝国大学内においては「図書館と共に博物館を建て大学のほこりの一つとして常時公開のものとしたいの希望は北條総長時代から継続して<sup>7)</sup>」いたものであったとしているが（北條は東北帝国大学第二代総長：1913～1917年、このときの総長は第三代総長の福原鏝二郎：1917～1919年）、これが東北大学における博物館構想を新聞報道として取上げた初発と思われる。

またこうした大学の外に開放する博物館構想は、東北大学の理念とも結びけられて報道されていた。1921年6月7日の河北新報では、東「北大が端緒を開く大学の開放」との見出し記事を掲載している。そこでは「所謂「大学の開放」は東北大学創設以来の一標語であるかの観がある積極的な民衆的な其の施設が常に従来への生えた帝大型に対する反逆ではあつた」と東北大学の門戸開放の理念を紹介した上で、「大学側の希望は仙台に博物館を設けたいと迄進んでゐる。それも建物さへ出来れば陳列すべき標本器械類は大学で提供して、必要な職員は勿論のことお手の物の専門家に依つて整理案配して公衆の観覧に供したい」と、広く開放されるかたちでの博物館設置構想を東北大がもっていることを記載している。当時、図書館の方は予算計上が進んでおり、建設工事着工の日処が立ちつつあったのに対し、博物館の建設費は国からは認められていなかった。このときの河北新報の記事では「或る教授の如きは博物館の経常費は大学で負担してもよいではないかと迄主張してゐる。さうなればこんな都合のよい話は沢山あ

る筈のないものではなく詰り僅二、三十万の現金があれば学都と自称する仙台に有つて然るべき博物館と図書館が生まれる訳だ」との論調を載せている。東北大学としては、国の予算措置がなされていない博物館建設費を、民間の資金をもとに博物館設置を進められないか、という考えがあり、仙台にとっての開かれた博物館という啓蒙と、東北大の門戸開放の理念が接合されていたといえよう<sup>8)</sup>。

東北帝国大学が置かれていた片平地区における博物館設置場所の構想については、1919年段階では前述の通り、二高空き地か二高西運動場が想定されていたが、1922年頃になると、金属材料研究所、理学部地質鉱物教室、生物学教室との中間にある旧監獄跡も候補地になっていたようである。1922年11月21日の河北新報では、同地での博物館は「周囲の諸建物との関係上少くも四層楼の建物とし本館の周囲は花園をもつて繞らす」というような希望が大学側であることが記事となっており、東北帝国大学第四代総長であった、小川正孝の博物館新設に関する発言として以下のような紹介がなされている。「大学としては現に持つてゐる標本その他を学術的に傾倒づけて陳列して置くといふことは、大学側としても必要なことであり、これを公開することに依つて一般の知識向上にも資したいと思ふ。大学には陳列すべき物があるのだから建物さへあれば容易に出来る訳だただ沢山の新規計画を持つてゐるので普通予算(ママ)としては如何かとも考へてゐる<sup>9)</sup>」。また建設費については、前年の河北新報の記事では2、30万ということであったが、ここでは「工費額百万円との見当」とされていた。一方、建設費が課題であるという大学側の見解は前年同様であり、小川総長は「イヤ全く金の問題だ。東京の講堂が百万円の寄附で出来たなんかは羨ましい」と述べている。この東京の講堂というのは安田善次郎の寄附を原資に建設されていた、東京帝国大学の大講堂(安田講堂)を指しているものと思われるが、東北帝国大学においては、大講堂建設に対比されるようなかたちで、「我国には未だ見ない特色の博物館が仙台に生れる」ことが想起されていたのである<sup>10)</sup>。

こうした博物館設置構想は1911年に理科大学が開設されてから10年以上が経過し、理学部を中心として標本類の蓄積が進み、既存の設備における収蔵限界問題が惹起しつつあったこととも関係していたようである。1923年8月16日の河北新報では、博物館は「単に観覧せしむるといふだけでなしに機械類であつたら動力を使つて実際に動かして見るといふ風に米国流の生きてゐる博物館にしたい」という陳列構想も紹介しつつ、理学部地質古生物学教室の事例をあげて、収蔵スペースに苦慮している様子を記事にしている。「東北大学地質古生物学教室では過般マンモス其他の多数の遺骨化石類を搬入したため階下陳列式では手狭を感ずるので廊下等の装飾等を兼て辛うじてその置場を設けてゐるこうしたことは啻に同教室に限つての現象ではなく物理化学等理学部内の他の教室でも工学部でも同様である殊に新設の生物学教室が完備して来れば遠からず同様の結果を招くことは明らかな訳だそれで大学当局では数年前から博物館建設の希望」がある、というのである<sup>11)</sup>。このときの河北新報の記事では、博物館設置実現についての熱心な主張者として、英米独への留学から帰国し、1922年に教授となり古生物学講座を担当していた松本彦七郎があげられている。また松本のほかにも、地質学講座教授を担当していた矢部長克、地質学古生物学教室の助教授であった早坂一郎なども、博物館設置を主張していたという<sup>12)</sup>。先にみた小川正孝など総長の考えだけでなく、理学部の講座担当教授からも収蔵スペースの問題から博物館設置が求められていたのである。

一方、1923年9月に関東大震災が発生したことで、大学側の計画の中で予算上「新規の計画

は打ち切りにしなければならぬ雲行きなので、大学側のかうした希望は実現容易でないこととなつた」ことが報道され、「博物館の計画は後回しになることになる（中略）折角熱の出て来た希望も当分実現はよほど困難な形勢と観測される」という見通しが河北新報を通じて伝えられた<sup>13)</sup>。翌1924年時点でも東北帝国大学としては「経費の出所がないので手のつけやうがないといふことになつてゐる」という状況であった。こうした状況から博物館設立は新聞報道においても「篤志家の寄附を待つよりない」といった認識が形成されていくようになる。こうした中で着目されていくのが、斎藤報恩会であった。1924年7月1日の河北新報では「報恩会の補助を得て計画したらどうか」という意見があることが紹介されている。斎藤報恩会の助成金を数年間振り分けていくことで博物館の設置を実現させていく、というもので、それが出来れば「大学のためになるのみならず地方のためにもなるので是非ともものにしたいと考へる人が多い」として<sup>14)</sup>。

この報恩会の寄附による博物館設置案は、同年7月17日の河北新報では「報恩会にも異議はあるまいとのことだ唯問題になるのは共同研究費として各学部平等に傾けたるべき資金を博物館に向けることは学内のある一部で金を独占することになるといふその点である博物館希望者達もこの点があるので出題することを控へてゐる様子であるが学部別に考へないで大学全局の上から見れば決して独占にはならないのであるから必ずしも異論によつて計画が崩れるといふやうなことはないであろう<sup>15)</sup>」と、報恩会の寄附が博物館に傾けられることで、特定の研究分野への資金集中との議論が起こることに注意しなければならない、という課題をあげている。地域にとっても大学にとっても有益である、という総論に対し、各分野の研究助成に制約が伴うことについては各論反対という主張が惹起される可能性もあり、斎藤報恩会の寄附による博物館計画は慎重な配慮が求められるものであったといえよう。

## (2) 斎藤報恩会による会館建設

斎藤報恩会は設立時においては自前の建物を有していなかったが1926年、仙台市勾当台公園南東部の大聖寺裏門通三番地に、まず「仮事務所」を建設している。建設に当たっては東北帝国大学が旧制二高から引き継いだ木造建物のうち不要となつたものから木材が転用された<sup>16)</sup>。これに伴い、産業及社会総務部、学術研究総務部が同所に移転することになる<sup>17)</sup>。

この建築は当初より仮事務所と位置づけられていたように、博物館機能をもつた恒久的な会館建設を前提としたものであったことが分かる。翌1927年2月16日斎藤報恩会評議員会において、斎藤報恩会館建築の件が議題にあげられ、委員5名による建設調査委員会を立ち上げ、建築に関する調査を行うことが決議される<sup>18)</sup>。この5名の選任については、同年4月18日付で小川正孝、井上仁吉、畑井新喜司、鹿又武三郎、岡野義三郎の5名が委嘱され、30日には、第1回委員会が東北帝国大学本部で開催された<sup>19)</sup>。その後同年11月に開催された理事会兼建設調査委員会での議論を経て<sup>20)</sup>、大体の室割及坪数を確定し、建築設計を懸賞で募集することとなる。この審査委員には、日比谷公会堂や早稲田大学大隈講堂などの設計を手がけた、日本女子大学教授の佐藤功一、関東大震災後の帝都復興院理事・建築局長を務めた東京帝国大学教授の佐野利器、東北帝国大学技師を務め、東北大学附属図書館等の設計を行っていた小倉強などの建築専門家に加え、斎藤報恩会からは、木村匡斎藤報恩会理事、畑井新喜司評議員が入っていた<sup>21)</sup>。

1928年末までに斎藤報恩会では、仮事務所が置かれていた敷地の南隣接地1131坪の買収が完

了、建設予定地が確定することとなり<sup>22)</sup>、1929年4月をメ切として齋藤報恩会館建築設計図案懸賞募集がなされた<sup>23)</sup>。この時点での募集案には会館に博物館施設の要件は明記されてはいない。図案は178件募集があり、同年5月に大阪住友合資会社建築課員の大原芳知の図案が一等に選ばれている<sup>24)</sup>。また、これらの募集図案は全て同年6月2～3日にかけて、宮城県図書館階上で展覧に供された<sup>25)</sup>。しかし、これら懸賞募集図案はあくまで参考とされ、「実際建築は目下外遊中の仙台高工土木科々長たるべき小倉強氏の帰省をまち前記入賞設計を参考として最終的設計図案をきめそれに基づいて」建築されることになる<sup>26)</sup>。小倉は1929年4月からドイツに留学中で帰国後、仙台高等工業学校教授に着任することになっており、懸賞募集の審査には携わっていなかった。図案懸賞は齋藤報恩会館建設のPR的な目的と、設計アイデアの収集以上のものではなく、最終的な建築に当たっては、小倉が設計を担うことは留学前からすでに前提となっていたものと思われる。

その後、小倉の洋行中動きのなかった会館建設に関する委員会は、小倉の帰国後具体的な動きを再開することとなる。1930年11月20日の評議員会で委員の追加を決め、理事長及び井上仁吉評議員会議長により、井上嘉都治、佐藤長成、新保徳壽が推薦された<sup>27)</sup>。その後、建設調査委員会は会館建築委員会に改称、1930年12月19日の評議員会閉会後に会館建築委員会が開催され、小倉強に建築設計を正式に委嘱することになった<sup>28)</sup>。小倉強は会館について、本館（集会室及講堂）と齋藤報恩会博物館を機能の中心におく図案を設計、設計案はその後1931年4月8日の会館建築委員会を経て<sup>29)</sup>、ほぼまとまり、5月26日の会館建築委員会で決定をみることになる<sup>30)</sup>。また敷地内に20坪の作業室が会館に先行して建設され、標本整理のための作業室が設けられた<sup>31)</sup>。

## 2、齋藤報恩会博物館の方針

### (1) 齋藤報恩会博物館の体制

1931年5月当時、学術研究総務部長には東北帝国大学理学部の畑井新喜司教授が着き、産業及社会総務部には、台湾商工銀行頭取などを経て郷里である宮城に戻り、仙都ビルの創立や宮城県町村長会長を担うことになる木村匡が着いていたが<sup>32)</sup>、1931年2月27日の齋藤報恩会評議員会で博物館機能も含めた会館経営要項が議決されると<sup>33)</sup>、このうち、博物館の事業は学術研究総務部に委嘱されることになる。また、齋藤報恩会博物館が竣工するにあたり、1931年から新たに「採集者相互の連絡を図り又博物館のニュース等を登載して各県の採集者に頒ち、又全国の主なる博物館との連絡をも図る」ため『財団法人齋藤報恩会博物館時報』が創刊された<sup>34)</sup>。創刊の趣旨が標本採集の相互連絡が第一義であったことにここでは着目しておきたい。

この博物館時報創刊号において、学術研究総務部長であった畑井は、齋藤報恩会博物館の目的について以下のように述べている。「博物館の目的は東北に関する事項を学術的に研究する事と同時に科学知識の普及を計るために観覧用の標本を陳列することでありませ<sup>35)</sup>」。齋藤報恩会博物館は学術的な研究と、科学知識普及のための陳列展示の2つの目的を内包するものとして位置づけられていたのである。こうした認識に基づき、畑井は博物館完成までに、資料たるべき研究用または観覧用標本、図書、史料等を短時間で収集し利用可能とすることが第一の急務であると考えており、博物館の機能を図書部と、標本部に分けて、1931年5月段階において、それぞれの収集方針を以下のように定めていた。

まず、「一、図書部に於ては東北六県の文化発達に関する図書及び史料を蒐集せねばならぬのであるが、不取敢右に関する完全なる目録編纂に従事すること」

ここで畑井が掲げている図書部の活動方針については、学術研究総務部主事（編集・図書）の任にあった小倉博がより詳細な位置づけを行っている。小倉によれば、「東北地方に関する図書を蒐集して研究の便益を図るべき特殊な図書館を設けること」が博物館に図書部門を置く主要な目的とされていた。しかし図書の完全な収集は、東北地方に関するものだけに限っても、多大な歳月と費用を要することから、早急に完成することは容易ではないとも認識されていた。そこで当面、「東北地方に関する事項を載せてある図書文献の完全な目録を数年を期して作製すること」を第一の事業とすることにしたという<sup>36)</sup>。

次いで、畑井の構想していた標本部の収集方針についてもみていきたい。

「二、標本部に於いては奥羽六県下に産する動物、植物、地質、鉱物、化石等の標本を今後五ヶ年以内に、少なくとも八分通り迄蒐集したい考（ママ）であります。此の蒐集方法は各県下の博物学会とか又博物学に興味を有する学友諸君の御援助によつて完成したい希望であります。

三、斯くして集つた史料や標本は広く学者の研究用に供するのみならず、又それが研究の奨励法に関しては近き将来に於いて何か積極的方法を設けたいと思つて居ります。

四、観覧用の材料としては東北に於ける代表的標本のみならず、東北以外に産するものと雖も、教育的価値あるものは陳列するが、更に一步を進め或は生物進化の道程を又は生物發育の順序を示すが如き設備をも加へたい希望であります又時々特殊展覧として古代又は現代の美術品とか東北地方特殊の病理標本とか理科方面の進歩を示す如き催しをも行ひたいと思ふて居ります。」

## (2) 標本採集委員会の活動

この具体的な標本収集のため、学術研究総務部には、動物系の博物館員として、東北帝国大学理学部生物学教室で助手を務めていた大淵眞龍、植物系の博物館員として、同じく東北帝国大学理学部生物学教室で副手を務めていた高松正彦の二名が配置されることとなったが<sup>37)</sup>、東北地方に関する各種標本に関しては、東北各県に標本採集委員会を設置し、委員会のもとで県毎に収集体制を敷くことになる。各県の標本収集委員会は、動物標本、植物標本、化石・鉱物標本などに分け、それぞれ主任と委員数名を委嘱するかたちで機能していたが、この委員は、中等教育機関、高等教育機関の教員を中心に構成されていたようである。例えば、宮城県では、1931年3月28日～29日にかけて、宮城県標本採集委員会を開催しているが、この委員の本務をみると、動物標本採集担当では、仙台二中、古川中、涌谷高女、気仙沼中、仙台工業、東北帝大の教員が委嘱を受けている。以下、植物標本採集担当では、仙台一中、東北学院、第一高女、気仙沼中、涌谷高女、古川中、宮城女、第二高女、化石・鉱物・鳥類標本担当では、東北帝大、仙台工業、鉱山監督局、といった構成になっている<sup>38)</sup>。

こうした人的ネットワークは仙台博物学会などの協力が背景にあったようである。仙台博物学会は、東北帝国大学理科大学開設以前の、1900年に第二高等学校で例会を開催して以降、仙台を中心に組織されていたもので、初期においては第二高等学校が会場となっており、安田篤や、伊木常誠など、第二高等学校の教師が主体となっていたようである<sup>39)</sup>。こうした郷土の博物関係団体の協力をもとに、各県に標本採集委員会が構成されていったことは、宮城以外の事

例からもみてとれる。秋田県標本採集委員会は、1931年4月15日「採集は主として秋田博物会員之に当たる」からなる一般規定を決議しており<sup>40)</sup>、同年5月3日開催の山形県標本採集委員会も、一般計画として「採集本部を山形県博物学会事務所（山形県師範学校内）に置く」と決定している。上記からも分かるとおり、山形県師範学校には山形県博物学会の事務所が置かれており、山形県師範学校長が同会会長を務めていた<sup>41)</sup>。また、こうした会場校は、文部省が1930年から1931年にかけて交付した「郷土研究施設費」などをもとにして、郷土研究資料からなる郷土室が設置されていた学校であった。秋田県標本採集委員会の会場校となった秋田県女子師範学校には、1930年に郷土研究室が設置されており、山形県師範学校にも、1929年に資料陳列室・郷土指導室・研究作業室が設置されていた。また、内山大介氏によれば、こうした郷土研究充実のために師範学校では、歴史地理、国語、手工、博物などの関係教師による郷土研究会などが組織され、郷土資料の収集、購入などが行われたという<sup>42)</sup>。山形県標本採集委員会の委員に委嘱された山形師範学校の橋本賢助は、山形県博物学会常任幹事を務めており、郷土研究委員会のメンバーでもあった<sup>43)</sup>。このように斎藤報恩会博物館の標本収集にあたっては、博物関係団体や郷土研究の拠点となっていた各県中等教育機関と、その所属教師との協力関係をもとにしながら、東北広域でゆるやかに連携していくことで、進められていったのである。

また、博物館運営方針について、資料収集とは別に畑井は、学術研究総務部が企図するものとして、

「一、博物館に於いての研究業績は報恩会に於いて出版し、広く学会に配布致したいと思ふて居ります。

二、博物館と同時に建設せられる講義室を利用して時々専門諸学者に依頼して学術講演会を開催し、一般に公開して文運の発展に供したい考（ママ）であります。

三、材料蒐集の任に当られる方々の功労を記念するため博物館友の規定を設け永く博物館との連絡を保ちたいと思ふて居ります。

四、館友相互の連絡を計るため毎月一回博物館時報を発行する積りであります」

と、四点を挙げていたが、こうした畑井の方針を踏まえて、1931年12月5日、斎藤報恩会評議員会では、斎藤報恩会博物館規程を定めた。

斎藤報恩会博物館規程は以下のようなものである。

第一条 財団法人斎藤報恩会に博物館を置く

第二条 博物館に於ては主として東北地方に関する事項を学術的に研究し併せて一般研究者に便せしめ且学術普及に必要な参考資料を陳列して公衆の観覧に供す

第三条 博物館に左の職員を置く

館長 一名

館務を掌理し所属職員を監督す

学芸員 若干名

館長の命を受け学芸に関する事務に従事す

書記 二名

館長の指揮を受け庶務会計に従事す

第四条 必要に応じ博物館に顧問又は臨時嘱託員を置くことあるべし

#### 第五条 博物館の事務を左の二部に分ち各部に主任を置く

- 一、標本部 自然科学に関する標本及科学知識普及に必要な各種資料の蒐集、整理、保管、研究陳列に関する事務
- 二、図書部 図書及史料の蒐集、整理、保管、研究、閲覧、編纂に関する事務標本部及図書部は右の外観覧、展覧、講演、映写等に関する事務を担当す

規程制定を受けて、学術研究総務部長を務めていた畑井新喜司が博物館長を兼ねることが評議員会で決定し、12月8日付で発令された。また学術研究総務部主事であった小倉博は図書部主任を兼務することとなり、同じく学術研究総務部主事（庶務・会計）であった新谷武衛が標本部主任を兼務することとなった。すでに博物館員として採用されていた大淵眞龍、高松正彦は学芸員、標本部勤務を命じられ、分担は従来通りであった<sup>44)</sup>。このように、規程上は新に博物館部門が新設されることになったものの、基本的には、学術研究総務部の部員が博物館部門を兼務する体制が敷かれたのである<sup>45)</sup>。

こうした東北各県毎に標本採集委員会を通じた標本収集体制を敷いた約1年後、1932年4月段階において、高松正彦は植物標本担当の立場から、採集方法の課題についてまとめている。高松が「先づ如何なる植物でも標本として価値あるものは選択することなしに採集して宜しい」と述べているように、当初収集にあたって選別基準は厳密に設けられていなかったようである。この結果、植物標本の傾向として、委員の公務との関係から時期として「夏季休暇を利用された方が多く」、春の植物は割合少なく、春の植物に比べて夏及び秋の植物が割合多い結果となった。植物の種類についても、「採集員の居住地附近即ち平地の植物が最も多く」、「顕花植物最も多く隠花植物は非常に少ない」傾向となった。また、標本作成技術についても偏差があったようで、「完全とは云へない標本も可なり多かつた顕花植物でさへ中学校や女学校の生徒が採集した様な葉許りの小さなものがあるかと思へば花許りのものもあり又栽培品もあつた」こと、「中には腊葉給水紙の取換へを忘れたか黒く黴が生へ、標本として価値のないもの」などもあったことを高松は指摘している。そして「数は少ないが非常に珍しい美しい自然の儘な標本を作られる方もあれば、単に標本として価値ある程度にどんな植物でもと多く集められる方もある。何れにしても結構なことではあるが標本としての価値を失はない様なものを作つて欲しい」と苦言を呈している。委員会の委員構成に中等教育機関の教師が多く参画していたことから、標本採集においては、委員だけでなく、郷土研究や教育の一環として中学校や女学校の生徒とともに収集や作成が行われていた事例もあったようである。一方、その結果として採集された標本の質の担保や、種類の網羅性を確保することについては、課題があったといえよう<sup>46)</sup>。

また、1932年6月12日には、採集委員会幹事会が仙台で開催された。前年の事例から夏休みが各県における採集期間の最盛期に入ることが予想されていたことから、各県の連絡と最終方針を事前に打ち合わせることが目的であった<sup>47)</sup>。出席者は畑井新喜司斎藤報恩会博物館長以下、斎藤報恩会博物館職員のほか、宮城県からの出席者は東北帝国大学理学部の曾根廣、同理学部附属浅虫臨海実験所の澤野英四郎（所在地は青森）、仙台一中の京道信次郎、仙台二中の佐々木喜一郎、鉱山監督局の川井景吉など最多の4名、そのほか山形県からは山形師範の橋本賢助、秋田県からは秋田鉱専の大橋良一、岩手県からは岩手師範の鳥羽源藏、青森県からは青森師範の和田干藏と基本各県1名ずつ出席していた。



畑井館長からは、1931年度に採集された標本数の概略説明がなされ、これによれば1年間で動物4000種8000個体、植物3000種22000個体、鉱物400個、岩石150個、化石50種900個体の収集がなされたようである。こうした収集には齋藤報恩会から各県に採集費が予算措置されており、その予算は1県当たり500円以内とし、宮城、岩手、青森の3県は齋藤報恩会が直接経費を取扱い、秋田、山形、福島は各県委託というように各県の事情に応じて配られていたようである。一方で収集2年目の経費は前年からは減額対応であったようで「事業が進行するに従ひ標本購入、整理等にかなりの支出を余儀なくせられ、各県の割当は昨年よりも少なくなつた次第であり」と畑井は述べており、予算のばらまきは2カ年目にして抑制的にしていく方針が採られていったようである。また齋藤報恩会博物館の学芸員であった高松正彦が前年度採集状況の偏差について述べていたように、畑井もこの採集委員会幹事会では、動物は「陸棲或は淡水産のものに今後力を注いで頂きたい」、植物は「今後は隠花植物の方面に努力して貰ひたい」、地質標本は「東北帝大の該当方面担当の専門家に臨時採集員として活動を願ひましたが、各位には此の方面にも尽力して頂きたい希望する」など、齋藤報恩会博物館として収集方針を具体的に伝えている。

この背景には、各県の収集体制が郷土研究に立脚したものであることを前提としつつも、齋藤報恩会博物館がそうした郷土研究の枠組みを超える学術的な博物館を志向していたことがあげられる。畑井は「近來郷土研究が盛になつて来たことは同慶に堪へないところであります。然し仙台にこうした大きな博物館事業が起りました以上蒐集した材料を単に一郷土のみに蔵することなく本館に集めて広く研究の資料に供し公開することは独り其の郷土のためのみではなく其の効果誠に大なるものがあると信ずるのでありまして広い見地から本館の充実を企図して下さる様切望致します」と、各県が郷土研究の枠組みの中で標本採集することを否定しないものの、齋藤報恩会博物館設立の意義と絡めて、郷土研究のみに執着することがないよう依頼している<sup>48)</sup>。そもそも齋藤報恩会博物館の建物竣工が1933年までに予定されており、1931～32年の2カ年で博物館に陳列する標本の整理は見通しを付けておく必要があった。齋藤報恩会開館建築が進捗する中で、「各位御採集の標本だけでも新館に移し夫々整理して陳列の形式をとりたい<sup>49)</sup>」ことから、齋藤報恩会博物館より採集委員に対して採集品の送付も1932年中に済ませるよう通知している。

こうした畑井館長の意向を受けて、1932年7月発行の『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第15号より、齋藤報恩会博物館学芸員による、各県採集委員に対し、採集を望む標本や注意点を周知するための「希望欄」が誌面に設けられることになる。標本部主任の新谷武衛は「本年は一段と採集標本の統一を図りたいためと、且又其時期に適した標本採集の注意を喚起する為めに、学芸員より今月は特に何を採集して頂きたいとか、どの方面に向つて活動して頂きたいとか、或は其の他の希望を各委員に簡単に忌憚なく本欄で述べる事にした次第である。故に各委員には是非本欄を熟読して希望の実現に努力して頂きたい<sup>50)</sup>」、と希望欄を設けた趣旨について述べている。

ところで、仙台における博物館構想は、沿革としては1910年代後半以降、東北帝国大学における理学部の標本の収蔵機能拡大を背景としていた。しかしこれまで見てきた通り、齋藤報恩会博物館の標本収集は、東北帝国大学理学部からの移管や寄贈をもとにしたものではなく、郷土研究のネットワークをもとに、東北各地から新規収集が図られていた<sup>51)</sup>。当該期、東北帝国

大学理学部では、1933年段階で独自に文部省へ「地質古生物標本及び図書室新営」の概算要求を行っている。要求理由には「研究上必要なる標本及図書が逐年増加したる結果在来の標本室及図書室にては到底収容し得ざる状態に至れり特に標本の如きは目下運搬箱に入れて廊下にまで山積されある状態にして研究上不便甚大なるのみならず延ては標本の性質上重量の増加を来たし為に現建造物の耐久力に悪影響を及ぼす恐れあり依て本新営の速かならんことを希望するものなり<sup>52)</sup>」というものであったが、この概算要求は認められたようで、15,952円の予算で鉄筋2階建て、建坪32坪、延床面積60坪の建物が1934年10月に着工、1935年3月に竣工することになる<sup>53)</sup>。この建物について、1934年8月17日の河北新報は「古生物学教室標本広く一般に開放 東北帝大博物館建設」と報道しているが<sup>54)</sup>、その後そのような一般開放の収蔵庫（博物館）として機能した形跡はみられない<sup>55)</sup>。斎藤報恩会博物館の採集委員には理学部地質学教室助手の曾根廣が参画していたほか、同研究室出身の野村七平が標本部学芸員として勤務するなど、人的な関わりは強かったものの、東北帝国大学所蔵の標本は一般公開を前提としない形で、斎藤報恩会博物館とは別個に大学として管理していく道を選択したのである。

### (3) 斎藤報恩会博物館開館後の役割

1933年に入ると、開館準備のために一時標本採集は見合わせて、特に陳列に必要な標本で採集の必要があるものに限って、各県採集委員会に斎藤報恩会博物館より依頼することに採集方針は変更された<sup>56)</sup>。また1931年から刊行されてきた『財団法人斎藤報恩会博物館時報』については従来毎月一号発行されていたが、1933年6月以降「一般採集差控えのため<sup>57)</sup>」数ヶ月おきの刊行に切り替えられることとなる。

現在確認することが出来る『財団法人斎藤報恩会博物館時報』は第30号までであり、30号に最終号としての文章の記載はないこともあって、以降刊行がされたのかどうかについては不明である。しかし1931年5月から1933年6月までは、約2年間で計23号分が刊行されたのに対し、1936年6月発行の第30号までの3年間では誌面数も大きく変ることなく、7冊のみに留まることになる。第24号以降の誌面には各県採集委員からの標本送付の記事も散見されるが、斎藤報恩会博物館開館以降、学芸員の業務は、東北地方に関する網羅的な標本収集から、専門分野に基づく採集、研究にシフトしていったようである。

1934年6月の『財団法人斎藤報恩会博物館時報』第25号では、学芸員の活動に関しては「既集標本を研究する目的で本年度より其の専門採集と研究を合せて行ふことにした」として、地質部の野村七平学芸員は「東北地方の貝類化石及化石一般」、動物部大淵眞龍学芸員は「東北地方の蚯蚓の種類及生態」、植物部の高松正彦学芸員は「東北地方の海藻」を方針に定めたことが報告されている。この専門に従って、野村学芸員は同年4月より「宮城県白石方面に数次採集を試み」、高松学芸員は「大潮を利し宮城県塩竈、松島付近の採集に成功収め目下青森尻屋、龍飛等本州最北端部に於ける採集」などが開始された<sup>58)</sup>。また斎藤報恩会博物館学芸員だけでなく、学芸員以外にも専門採集研究を行う体制が新たに敷かれた。地質部では馬淵精一（東北帝大助手）が宮城県北部の地質及化石、江口元起（東北帝大助手）が岩手県東海岸中生代化石、神保恵（東北帝大）が山形県下新生代貝化石、曾根廣（東北帝大助手）が宮城県下の貝塚をテーマとし、動物部では京道信男（東北帝大大学院）が東北地方の淡水産海綿、植物部では富樫浩吾（盛岡高農教授）が「一、盛岡を中心として寄生菌類 二、岩手山寄生菌類 三、秋田県八幡平

付近の採集 四、岩手県下茸類」、佐藤正己（東京帝大大学院）が東北地方の地衣類の採集研究に当たることとなった<sup>59)</sup>。

こうした体制とともに、博物館の研究結果を随時発表するために、従来の時報ではなく、『Saito Ho-on Kai Museum Research bulletin』が発刊されることとなる<sup>60)</sup>。学芸員はそもそも東北帝国大学理学部出身者であり、このとき設けられた専門採集研究の協力者についても、東北帝大の助手、副手、大学院生がほとんどを占めていた。齋藤報恩会博物館は、東北帝国大学理学部、とりわけ畑井新喜司館長が教授として講座担当していた生物学教室を中心とした人脈をもとに、研究に軸足を置いていくことになっていったのである。

こうした齋藤報恩会博物館開館後の研究志向の体制については、採集委員会との関係性からもうかがえる。東北各県で組織された採集委員会を招集しての幹事会は1932年に行われて以降、『財団法人齋藤報恩会博物館時報』上では記事は確認できない。おそらく実態としても開催されなかったものと思われる。1935年2月になって、齋藤報恩会学芸員と採集委員との座談会がようやく開催されているが、これも仙台採集委員が招集されているのみで、県外の採集委員は含まれていなかった。この座談会の席上、畑井館長は博物館の標本点数に関して「必ずしも誇り得るものではないが創設日尚浅き当館としては此の藏品を得たことに対し採集委員各位に深甚の感謝を捧げるものである。標本蒐集の事業は博物館の存在と共に永続すべきことであり此の意味に於て将来採集委員と密接な接触面を持つて行かなければならぬと考へる」と述べる一方で、齋藤報恩会博物館開館に当たる1933年度以降については、「博物館の本格的活動の第一期に立ち入った次第でありまして、其の第一着手として蒐集標本を学界に発表することに方針を定め其の方針に依り各学芸員がバストを尽して来たのでありまして、一般的採集は見合わせ専門家に依頼して現在館が所蔵する標本を基礎とし更に其の足らざるところを補ひ、そして其の研究業績を逐次学界に発表することに致した」と採集委員との関係は保持するとしながらも、積極的な採集は行わず、館所蔵標本の研究と成果公開を重視する姿勢を打ち出している。

積極的な標本採集を控える背景には、収集された標本の整理が追いついていない状況も背景にあったようである。畑井は「研究標本の整理につきましては昭和八年以来経費の許す範囲内で機会ある毎に東京帝大其他の専門学者に依頼して同定を乞ひタイプスペーシメンを作り置くことに努力してきました。経費や時間の関係で各部門全部に亘りこうした整理には今後多くの時間を必要とすることは申すまでもないこと」としている。標本の整理分類については専門性が高く、各県の採集委員の知見では齋藤報恩会博物館が求める水準には対応出来なかったことが分かる。このため、収集と整理、及び整理された標本に基づく研究公開のバランスから、博物館の展示陳列用の標本が確保されて以降においては、収集の必要性は相対的に低下していたのである。

こうした状況から、1931年以降発行されてきた『財団法人齋藤報恩会博物館時報』のあり方が問われることとなり、仙台採集委員座談会でも、博物館時報の編集改善が話題にあがっている。収集委員からの意見は「要約すれば博物館時報の利用を普及し同時に研究報告が別に刊行せられるやうになつたことでもあり此の際時報を趣味的に編輯してはどうかとの声が高かった」。この「趣味的」の内容の一端としては、博物館時報を月刊とし、その内容に就ては六冊は各県号として、「各県号のものは其地方の博物学会に編輯を依頼し其の博物学会の機関誌としての体裁を取り入れたらどうか」というもので、その「意見は多かった」ようである<sup>61)</sup>。しかし

結局大幅な誌面構成の変更を行わないまま<sup>62)</sup>、1936年6月の第30号以降、博物館時報の刊行は継続されなかった。博物館時報は、収集から整理、研究へ斎藤報恩会博物館の方針が移っていった中でその役割を終えることになるのである。

## おわりに

斎藤報恩会博物館の開館は1933年であったが、仙台に博物館を設ける構想は、東北帝国大学の拡充の中で、1910年代後半から議論されていたものであった。しかし、東北帝国大学においては、法文学部や理学部生物学教室の設置や、附属図書館の建設などは大正期において実現していくことになるものの、博物館設置構想の予算化は進展しなかった。このため1920年代、とりわけ関東大震災後において、東北帝国大学の博物館設置構想の財源が国費では難しい状況になる中、斎藤報恩会が財団法人として設立されると、斎藤報恩会による博物館建設寄附に期待が持たれていくようになる。こうした動向を受けて1927年に斎藤報恩会では、本格的な財団の会館を建設するための調査委員会が立ち上げられ、翌1928年には建設予定地が買収された。1920年代後半において、この斎藤報恩会館が博物館機能を有するか否かについては明示的ではなく、建設自体も進捗しなかったが、最終的な設計者となる小倉強が帰国して以降、会館に博物館機能を設けることが既定路線となり、1931年に斎藤報恩会博物館が設置されることが確定することになる。

博物館開館にあたっては、東北各地から標本収集がなされることになるが、その中心的な役割を担ったのが、各県に置かれた標本採集委員会であった。標本採集委員会には、各県中等教育機関の所属教師等が主に委員として参画していたが、委員は郷土の博物関係団体や郷土研究に積極的な学校に在籍していることが多く、そうした郷土研究との協力関係をもとにしながら、標本採集は進められていった。一方、標本採集は各県の標本採集委員会の活動に委ねた反面、標本の質や種類の偏りは否めなかった。そのため徐々に、各県標本採集委員会の自主的な収集体制から、斎藤報恩会博物館の学芸員等による収集方針の周知や統制が企図されていくことになる。加えて収集された標本は、より専門的に整理分類をする必要があったことから、標本整理公開に時間と経費が回されるようになっていく。

また、整理公開と研究成果の発表とが連動する仕組みを斎藤報恩会博物館は目指すようになり、『Saito Ho-on Kai Museum Research bulletin』が発刊されることとなる。この研究体制を構築するため、標本部には開館時より常勤の学芸員が配置されていたが、さらに専門採集研究の協力者が委嘱されるようになる。もともと学芸員は東北帝国大学理学部出身者で構成されており、協力者についても、東北帝大の助手、副手、大学院生がほとんどを占めていた。こうした研究志向の中で、標本採集委員会の役割は低下し、標本採集委員会との関係を繋いでいた『財団法人斎藤報恩会博物館時報』も1936年以降休刊となった。

斎藤報恩会博物館は、資料収集においては、郷土研究とそのネットワークを活用した体制を組む一方で、整理公開の段階においては東北帝大の出身者を中心とした研究体制に運営の軸を置いていった。このように斎藤報恩会博物館は、郷土研究と学術研究との役割を上手く切り分けながら、開館前後の必要性に応じて運営方針のウェイトを変化させていったのである。

表 齋藤報恩会博物館設立年表

年(西暦)	月	事項
1919年	1月	河北新報において東北帝国大学の博物館設置構想報道
1923年	2月	財団法人齋藤報恩会発足
1924年	7月	河北新報において齋藤報恩会寄附による大学博物館設置論報道
1925年	5月	齋藤報恩会学術研究総務部設置
1926年	7月	齋藤報恩会仮事務所竣工
1927年	2月	評議員会において齋藤報恩会館の建設調査委員会設置を決議
	4月	建設調査委員会委員選任及び建設調査委員会開催
	11月	理事会兼建設調査委員会開催、建築設計を懸賞募集することを協議
1928年	11月	齋藤報恩会館予定地買収(報道)
1929年	1月	齋藤報恩会館設計図案懸賞募集開始
	5月	齋藤報恩会館設計入選図案決定
	6月	齋藤報恩会館募集図案展覧会(於:宮城県図書館)
1930年	11月	評議員会において建設調査委員会委員増員決議
	12月	理事会兼建設調査委員会開催
	12月	評議員会において建設調査委員会の原案承認、建設調査委員会は会館建築委員会に改称
	12月	小倉強に齋藤報恩会館の建築設計委嘱
1931年	2月	評議員会で博物館機能も含めた会館経営要項が決議
	3月	第一回宮城県標本採集委員会開催
	4月	第一回青森県標本採集委員会開催
	4月	第一回岩手県標本採集委員会開催
	4月	第一回秋田県標本採集委員会開催
	4月	第一回福島県標本採集委員会開催
	5月	第一回山形県標本採集委員会開催
	5月	博物館標本整理室竣工
	5月	『財団法人齋藤報恩会博物館時報』創刊
	5月	会館建築委員会において小倉強による建築設計図案確定
	7月	齋藤報恩会館設計完成
	8月	理事会において工事業者清水組に決定
	9月	齋藤報恩会館建設着工
	10月	仮標本置場新設
	12月	評議員会で齋藤報恩会博物館規程承認
12月	評議員会で齋藤報恩会博物館長承認(畑井新喜司館長)	
1932年	3月	評議員会において齋藤報恩会博物館規程改正承認
	6月	採集委員会幹事会開催
	9月	理事会兼建築委員会開催、暖房装置について協議
	10月	評議員会において畑井館長より博物館事業報告
	12月	建築委員会開催、館内装飾、家具について協議
1933年	2月	齋藤報恩会館竣工
	3月	評議員会において齋藤報恩会博物館物品寄託規程承認
	6月	齋藤報恩会館外構工事開始(田村組)
	9月	理事会において開館式予定日決定
	9月	宮城県立図書館所蔵博物標本の移管
	10月	評議員会において齋藤報恩会博物館観覧規程承認
	10月	評議員会において齋藤報恩会講堂使用規程承認
	11月	齋藤報恩会博物館開館
1934年	6月	『Saito Ho-on Kai Museum Research bulletin』創刊
1935年	2月	仙台採集委員座談会
1936年	6月	『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第30号発行

※出典:『事業年報』『財団法人齋藤報恩会時報』『財団法人齋藤報恩会博物館時報』各号、『河北新報』

## 注

- 1) 本稿では文章中では、斎藤報恩会名称を用い、刊行物や史料引用箇所などについては適宜、出典漢字表記(斎藤報恩会)のまま掲載することとする。
- 2) 吉葉恭行、米澤晋彦『斎藤報恩会と東北帝国大学－財団設立の理念と学術研究助成の実際－』東北大学出版会、2020年。このほか斎藤報恩会の評価については、林雄二郎、山岡義典『日本の財団』中央公論社、1984年、川添登、山岡義典『日本の企業家と社会文化事業－大正期のフィランソपी－』東洋経済新報社、1987年
- 3) 菅野正道「斎藤報恩会と郷土史研究」『東北大学史料館紀要』第12号、2017年
- 4) 前掲『斎藤報恩会と東北帝国大学－財団設立の理念と学術研究助成の実際－』、1頁、吉岡一男「斎藤報恩会・その半世紀の回顧」『財団法人斎藤報恩会のあゆみ：財団85年・博物館75年』斎藤報恩会、2009年、81頁
- 5) 河田健「財団法人斎藤報恩会博物館と設計者小倉強について」『日本建築学会計画系論文集』693、2013年
- 6) 「図書館と博物館 法文科動植物科併置と共に東北大学内に設立」『河北新報』1919年1月16日
- 7) 「東北大学の博物館 貴重な出陳品を豊富に備へてる」『河北新報』1922年12月17日
- 8) 「北大が端緒を開く 大学の開放 図書館も博物館も・・・動植物園も臨海実験所も市民の意思次第で実現」『河北新報』1920年6月7日
- 9) 小川正孝は、1911年に東北帝国大学理科大学が開設された際に理科大学教授として着任し、同理科大学長を経て、1919年から1928年まで総長を務めた。
- 10) 「東北帝国大学に博物館の計画 陳列する物も沢山ある 地所も旧監獄跡を相してる 問題は建築費百万円」『河北新報』1922年11月21日
- 11) 「必要迫られる 北大の博物館 現在の陳列室ではとても収容しきれない」『河北新報』1923年8月16日
- 12) 「東北大学の植物園と博物館 宿題のまま未解決 これも報恩会ものか」『河北新報』1924年7月1日
- 13) 「植物園と博物館 大学での計画も自然後回しになる」『河北新報』1923年10月25日
- 14) 前掲「東北大学の植物園と博物館 宿題のまま未解決 これも報恩会ものか」『河北新報』
- 15) 「東北大学の博物館建設 共同研究費を其方に用ゐて計画するか」『河北新報』1924年7月17日
- 16) 『予算決算二関スル書類』、1926年、斎藤報恩会文書、東北大学史料館所蔵(曾根原理・永田英明・村上麻佑子「企画展「学都仙台を支えた「天財」－斎藤報恩会と東北大学」『東北大学史料館紀要』第12号、2017年、118頁)。
- 17) 「仮事務所建築」『財団法人斎藤報恩会時報』第1号、1926年、36頁
- 18) 『事業年報』第3号、財団法人斎藤報恩会、1928年、283頁
- 19) 「斎藤報恩会館建設調査委員会」『財団法人斎藤報恩会時報』第5号、1927年、28～29頁。小川正孝は第4代東北帝国大学総長、井上仁吉は第5代東北帝国大学総長、鹿又武三郎は仙台市長、岡野義三郎は第二高等学校長を務めている。
- 20) 「理事会兼会館建設調査委員会」『財団法人斎藤報恩会時報』第11号、1927年、29頁
- 21) 「会館建設」『財団法人斎藤報恩会時報』第13号、1928年、36頁
- 22) 「会館建設敷地」『財団法人斎藤報恩会時報』第23号、1928年、33頁
- 23) 「斎藤報恩会館建築設計図案懸賞募集規程」『財団法人斎藤報恩会時報』第25号、1929年、39頁
- 24) 「斎藤報恩会建築設計図案審査報告」『財団法人斎藤報恩会時報』第29号、1929年、29頁
- 25) 「会館設計図案展覧」『財団法人斎藤報恩会時報』第30号、1929年、23頁
- 26) 「斎藤報恩会館 小倉氏の帰朝を待つて建築」『河北新報』1930年9月6日
- 27) 「会館建築調査委員補欠」『財団法人斎藤報恩会時報』第47号、1930年、24頁。井上嘉都治は医科学者で東北帝国大学教授、佐藤長成は仙台市議を務めた弁護士、新保徳壽は仙台高等工業学校長を務めている。
- 28) 「会館建築委員会」『財団法人斎藤報恩会時報』第49号、1931年、15頁
- 29) 「会館建築委員会」『財団法人斎藤報恩会時報』第52号、1931年、26頁

- 30) 「会館建築委員会」『財団法人齋藤報恩会時報』第54号、1931年、17頁
- 31) 「作業室の工事進捗」『財団法人齋藤報恩会時報』第52号、1931年、31頁
- 32) 仙台商工会議所七十年史編纂委員会編『七十年史』仙台商工会議所、1967年、165頁、波形昭一『植民地台湾の銀行家・木村匡』ゆまに書房、2017年
- 33) 新谷武衛「齋藤報恩会博物館の建設に至る迄」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』創刊号、1931年、11頁、『事業年報』第7、財団法人齋藤報恩会、1931年、430頁
- 34) 「博物館時報の創刊」『財団法人齋藤報恩会時報』第52号、1931年、31頁
- 35) 畑井新喜司「博物館の経営方針に就て」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』創刊号、1931年、1頁
- 36) 小倉博「図書部の事業」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』創刊号、1931年、2頁
- 37) 「雑報 本部標本整理係」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』創刊号、1931年、13頁、『東北帝国大学一覽 昭和2年4月至3年3月』東北帝国大学、1927年、55頁、『東北帝国大学一覽 昭和5年4月至6年3月』東北帝国大学、1930年、41頁
- 38) 「雑報 宮城県標本採集委員会」「図書部の事業」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』創刊号、1931年、12頁。動物標本収集担当、鳥類標本収集担当には、単に若柳町とのみ記され教員の有無が不明な者が一名委員となっている。
- 39) 「仙臺博物学会記事」『動物学雑誌』13 (158)、1901年、421～423頁
- 40) 「雑報 秋田県博物標本採集案」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第2号、1931年、6頁
- 41) 「雑報 山形県標本採集案」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第2号、1931年、7頁
- 42) 内山大介「昭和戦前期の師範学校郷土室と博物館活動—地域博物館前史としての基礎的考察—」『博物館学雑誌』第37巻第2号 (通巻56号)、2012年
- 43) 長井政太郎「郷土博物館成立の思い出」『山形大学附属郷土博物館報』No.2、1975年
- 44) このほか囑託員として野村七平が化石整理を担当した。
- 45) 「雑報 齋藤報恩会博物館規程」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第9号、1932年、9頁
- 46) 「昭和六年度植物採集を顧みて」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第12号、1932年、1～2頁
- 47) 「各県幹事の打合せ開催」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第14号、1932年、10頁
- 48) 「採集委員幹事会記事」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第15号、1932年、1～2頁
- 49) 「採集委員へお願い」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第18号、1932年、8頁
- 50) 新谷武衛「希望欄を設けたことに就て」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第15号、1932年、14頁
- 51) このほか、齋藤善右衛門の寄附で宮城県立図書館が購入していた博物標本が、齋藤報恩会博物館を期に無償譲渡となり、1933年9月28日に移管搬入がなされている（「博物標本移管」『財団法人齋藤報恩会時報』第82号、11頁）。
- 52) 『昭和九年度概算書（部局提出ノ分）』（財主/2009/Ⅱ-033-1）東北大学史料館所蔵
- 53) 『自大正十五年度至昭和十一年度建物其他落成報告書綴』東北大学所蔵
- 54) 「古生物学教室標本広く一般に開放 東北帝大博物館建設 今月中に工事に着手する」『河北新報』1934年8月17日
- 55) 「地質学教室便り」『自修会報』No.21、東北帝国大学理学部自修会、1935年、185～186頁
- 56) 「雑報 一般採集方針変更」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第23号、1933年、11頁
- 57) 「雑報 博物館時報発行に就いて」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第23号、1933年、11頁
- 58) 「雑報 本館学芸員の活動状況」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第25号、1934年、9頁
- 59) 「雑報 専門採集研究」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第25号、1934年、9頁
- 60) 「雑報 研究の発表機関」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第25号、1934年、9頁
- 61) 「仙台採集委員座談会々況」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第28号、1935年、14～15頁
- 62) 従来横書きの文章も掲載されていたが、誌面構成は第30号のみ、全ての誌面が横書きとなっている。座談会では「純学術的のものを掲載する場合には横書きを」との希望が出ていた（「仙台採集委員座談会々況 二博物館時報について」『財団法人齋藤報恩会博物館時報』第28号、1935年、14～15頁）。